

(研究ノート)

日本語と英語の違いを意識した英語学習
—語順、時制を中心に—

Toward Better Understanding of English for Japanese Learners through
Awareness of Differences between the Two Languages

佐藤 秀樹*
Hideki SATO

はじめに

私は長く英語教師を勤めてきたが、その間さまざまな学生に接してきた。英語が不得意な学生も多かったが、何とか英語を理解したいと苦闘する者が大半であった。中学のときから英語がよく分からなかったと嘆く学生もいたし、英語が嫌いだと公言する学生もいたが、心底から英語を嫌っている者は意外と少ないように思えた。英語が嫌いだと答える学生でも、さらにつっこむと「本当は英語を話せるようになりたい」、「英語が理解できるようになりたい」と答える者も少なくなかった。彼らは、英語がよく分からないために、「英語嫌い」になったのだと推察された。早くも中学低学年段階で英語の授業について行けなくなったという学生もおり、なぜ彼らがそうなったかを常に考えてきたが、その原因は学生の学力が低いというような一言でかたづけられるものではなく、日本語と英語の仕組みが著しく異なることからくる戸惑いに英語教師がうまく対処できなかったことが大きいのではないかと考えるようになった。外国語を学習する際に母語が障害になることは広く知られている。また学習しようとする外国語と母語の違いが大きければ大きいほどその困難

は増す。英語と日本語の違いは極めて大きい。語順の違い、名詞の単数・複数の有無など違いを数え上げるときりがない。そのため英語教師は英語の仕組みに精通するだけでなく、英語と日本語のどのような差違が学習の障害になっているのかも知っておく必要がある。

日本の英語教育は伝統的に訳読中心で行われてきた。古来より海外の知識や文化を取り入れて活用してきた日本において、外国語によって伝えられたもの(古くは漢語、江戸時代にはオランダ語、明治以降は英独仏語)を日本語に翻訳して国内に広める必要があったため、外国語を日本語に移す力を養成することが外国語教育の中心になったことは自然なことであった。また外国語を効率的に学ぶためには文法の学習が重要であることは論を俟たないが、入学試験(戦前は旧制中学、旧制高校。戦後は高校、大学)において外国語が重視されたこともあって、学校文法と呼ばれる学校教育用の英文法が独特の発展を遂げてきた。そのため卒業して何年もたった後でも五文型、三単現などの用語だけは覚えているという者も多い。教室内では文法力や単語力が重視され、スピーキングは正規教育で学ぶ価値のないものとき

*長野大学名誉教授

れ、街の英会話教室や放送出版メディアを通して個人的に行うものとの認識が定着していた。しかし日本が経済的に発展し、日本人が直接海外の人びとと交渉したり、交流したりする機会が多くなるにつれて、一転してコミュニケーション型の英語教育が重視され、文法教育が軽視されるようになってきた。

しかし母語をすでに身につけている外国語学習者にとって、その外国語の仕組みを理解することなく、やみくもに外国語の文を聞き流したり、暗記したり、暗唱したりするだけではかえって遠回りになる。よく幼児の母語獲得が引き合いに出されるが、根気強く間違いを修正してくれる親や家族が周りにいて、24時間母語の中に暮らし、12年間かけて中学入学段階の子供の言語水準になるだけなのである。母語と構造が大きく異なる外国語を学ぶ場合には、学習する外国語の仕組みをある程度把握することが外国語学習の近道なのである。問題はどの程度まで文法を理解すればよいのかということである。外国語習得のための文法学習は、あくまでも仕組みを理解することがその外国語の習得に役立つ限りでよいのであって、文法そのものに精通する必要はまったくない。その外国語がある程度使いこなせるようになれば文法は忘れ去ってもまったく差し支えないのである。日本の文法教育はともすれば形式主義に陥りやすく、文法用語はよく覚えているが言語そのものは身に付かないということになりかねない¹⁾。具体的には後で述べるが、形式(文法)は内容(意味)をともなっていないければ役に立たないわけであり、英語教師は文法と意味がどう結びついているのかに留意しながら学習者にわかりやすく説明する必要がある。

そこで本稿では、とくに英語学習者のつまづきのもとになりやすいと思われる、語順の違いと日本語における「てにをは」の特質、英語における語順と基本動詞の意味範囲、英語の時制の問題に絞って、私の考えを述べてみたい。その際の私の関心は、文法的に英語を解明したいということではなく、英語の特質を理解して少しでも英語学習者の理解を容易にしたいということである。

本論に入る前に、現在の英語教育の主流であるコミュニケーションのための英語教育と訳読を通じた英語教育に対する私の考え方を述べておきたい。母語である日本語を獲得した後に外国語を学習しようとすれば、まずは母語に頼らざるを得ないのは自明

であって、訳読がまったく意味がないというわけではない。しかし、言語構造の異なる英語を直接日本語に置き換えると、意味がずれてしまう場合も少なくなく、会話の際には聞き取った英語を日本語に訳し、日本語の文を英語に訳して話すだけの時間的余裕はない。そこで近年はネイティブを使って、英語を英語のまま教えるという方法(ダイレクトメソッドなど)が有力になってきた。しかし、この方式は少人数のグループでないと効果が出にくいという物理的な制約(母語は親と子という少人数間で学ばれる)の他に、そもそも単語の意味が分からないものに、訳を使わないでどうやってその意味を分からせるかというジレンマがある。もちろん具体的なものについては、現物、写真、身振りなどを通して学ぶことができるが、抽象的な語については限界がある。私は、基本的な語と文法の基礎については日本語を活用しながらも、特に文法については形式主義、些末主義²⁾に陥らないように気をつけて、英語の語順のまま文を理解し、また完成された日本語文を英語にするのではなく、英語の語順を崩さず語を置いていくような練習が大切ではないかと考える。しかし本稿では練習法まで進む余裕はない。まずは英語の仕組みの理解に力点を置いて考えてみたい。

1. 語順の違い、意味の違い

(1) 英語の語順、日本語の「てにをは」

日本語には、名詞の後ろにつける「は」や「が」などの助詞、いわゆる「てにをは」がありはなはだ便利であるが、日本語のように助詞を持つ言語は英語とまったく異なる構成原理を持っており、英語学習に障害になる場合がある。次の例文を見ていただきたい。

Kenji watched a movie in Shinjuku last Sunday.

(ケンジは日曜日に新宿で映画を見た)

英文の下に訳例をつけたが、実は異なった語順の訳文も可能である。「日曜日にケンジは新宿で映画を見た」、「ケンジは新宿で日曜日に映画を見た」、「新宿でケンジは日曜日に映画を見た」などさまざまな組み合わせが可能である。そのうちのいくつかの組み合わせで不自然に響くものもあるが、文意が変わるものではない。この融通無碍と言っても良い日

本語の特質を可能にしているのは「てにをは」つまり助詞の存在である。上の文の中でないと文が成り立たなくなる語は「見た」だけである。それ以外の語はどれも「見た」の修飾語であって、必要なら省略することもできる。「ケンジは日曜日に映画を見た」「新宿で映画を見た」などのようにである。「ケンジは」や「日曜日に」などの修飾語には文法的な軽重はなく、互いに対等であり、どれかを省略しても文は成り立つし、意味不明になるということはない（もちろん省略が多いとそれだけあやふやな文になるのであるが）。英語文においては主語となる「ケンジ」も、日本語では「日曜日に」以上の重要性を持っているわけではない。日本語においては、極端な場合「A:見た?B:見た。」のような会話も可能である。上の日本語訳文を修飾・被修飾の関係がわかりやすいように並べ替えると次のようになる。

ケンジは ↓
日曜日に ↓
新宿で → 見た。
映画を ↑

つまり、日本語において修飾語は被修飾語を同時的に、対等に、いわば複線的に修飾しているのである³⁾。その際明確な意味のつながりを保証しているのは助詞であって語順ではない。語順を変えても意味は変わらないが、助詞を入れ替えるとたちどころに意味が変わるか、意味不明になる。

ケンジを日曜日に新宿は映画で見た。

この文は訳文例の助詞を入れ替えた文だが、語順は変わっていないが意味がまったく異なり、頭をひねるような文になっている。この文の唯一可能な解釈は、新宿という名前の人物が映画に出演しているケンジを発見したというものであろう。このことから分かるのは、日本語においては語順ではなく助詞の入れ替えによって文の意味構成がなされるということである。また特徴的なのは各修飾語の間に軽重がないことである。上記訳文例4つの修飾語の中で省略できないものは一つもない。状況と必要に応じて修飾語を自由に省略したり付け加えたりできるのである。

対照的に英語では語順がきわめて重要な意味を

持っている。上の英語例文をあらためて見てみよう。

Kenji watched a movie in Shinjuku last Sunday.

訳例文と異なり「Kenji watched a movie」の部分の語順を変えることはできない。語順を変えると意味が変わるか、(この文の場合)意味不明となる。英語において意味確定の上で重要なのは語順である。日本語の助詞のような便利なものがなく、代名詞以外は格変化を行わない英語において、語順が意味の上で決定的な役割を果たす。英語においては動詞を中心として、動詞があらゆる動作行為を発するもの(主語)が左に(時間的には先に)置かれ、動作行為を受けるものが右に(時間的には後に)置かれる。

Kenji →watched (動作主Kenjiが動作行為を発する、その動作行為は見るというもの+過去)

watched →a movie (見る動作行為の受け手は一本の映画)

上の例で矢印は強い結びつきと意味的な流れをあらわすが、何であれ動詞の前に置かれる語が動詞があらゆる動作行為を発し、動詞の後ろに置かれるものが動作行為を受けることになる。次の文を見てみよう。

Beautiful makes happy.

これは文法的に間違った文とも言えるが、この文を聞いた(または見た)英語母語話者はBeautifulを主語、happyを目的語と理解しようとし、頭をひねるはずである。そして形容詞を名詞に変えて「Beauty makes happiness.」としてみたり、Beautifulとhappyの前にそれぞれbeingを挿入して「Being beautiful makes being happy.」としたり、また「Beauty makes people happy.」としてみたりするであろう。誤解を恐れずいうと、英語においては動詞(他動詞)の前後に置かれるものを名詞的に理解するのであり、品詞があらかじめ確定しているわけではなく、語順が品詞を決める働きをしていると言ってもよいのである⁴⁾。

英語において主語(動作主)、動詞(動作行為)、目的語(受け手)は単線的につながっており、主語

から動詞に向かって圧力のようなものが流れ、また動詞から目的語に向かって圧力がかかるという構造になっている⁵⁾。日本語のように助詞が付け加えられるわけではない。また関係も対等ではない。あくまでも動作行為を発する動作主 (Subject主語・主体) が文全体の支配的な位置を占め、動作行為の受け手 (Object目的語・対象) は従の存在となる。ところが、英語学習者が英文を理解しようとする、どうしても (無理からぬことではあるが) 助詞を付け加えながら解釈しようとするために、英語と異なる複雑的な修飾関係へと文の性質を変えてしまうことになり、動作主 (主語) →動作行為 (動詞) →動作行為の受け手 (目的語) の結びつきを緩めてしまうことになる。英語においては語の位置によって「→」で示した圧力流れの出発点か到着点かが決まるわけであり、「は」や「を」のようなものが付け加えられるわけではない。

また日本語において助詞「は」は主格をあらわす格助詞としての役割以外に、「映画は見たよ」などのように、助詞「は」の前にくるものを話題化する係助詞でもある⁶⁾。「僕は天井」のような文が「僕＝天井」をあらわすとは誰も思っていない⁷⁾。しかしこのような文は日常頻繁に口にされており、上で触れた日本語における自由な省略と相まって、簡単な英文を作ろうと思っても、日本語から発想するとかなり苦勞することになる。このような困難を克服するためには、語順が固定的な英文の特質を理解した上で、語を単線的に配置する訓練をすることが有効である。

(2) 英語の語順と動詞

英和辞書で基本的な動詞 (be, have, getなど) を引くと20以上も意味が載っているうんざりさせられるが、ロンドンやニューヨークの街場の兄ちゃんが文例ごとに違う意味を理解していることなどありそうもない。英語の動詞は、語単独の場合 (特に基本的な動詞の場合) には、意味が曖昧なままであるが、ただし中心的なイメージがぼやとした中にもなんとなく存在するというのが本当のところではないだろうか。こうした英語の動詞の特性は語順から来ていると考えられる。日本語でも英語でも文の後ろに行くほど意味全体が明確になるように構成されるという点では同じである。日本語において動詞は文末に置かれ文全体の意味を確定する役目を持って

いるが、英語の動詞は主語の次という文の前半部に置かれているため、文全体の意味の明確化ではなく、さまざまな状況に対応する役割を果たさなければならない。例えば動詞haveは漠然と動作主と受け手の結びつきをあらわすだけで、明確な意味は受け手・目的語の種類、形容詞などの修飾語、場所や状況、時間などによって確定されることになる。「主語+have」だけでは意味をなさず、目的語を待って意味の明確化が始まる。

Maria has money

(これで文が終わる場合は所有の意味となるが、続く場合はそれほど明確ではない)

Maria has money ready

(金を準備してあるという意味。準備しているのだから所有もしている)

Maria has money ready for a new car.

(この段階で車の買い換えの資金であることが分かる)

しかしMaria has money back from Kenji.となると、貸していた金が返ってきたことになるし、同じ意味をMaria has money paid back by Kenji.とも表現できる。一方Maria has lunch.となるとこの結びつきが口を通したものになるが、has lunch一体となって意味ができあがるのであり、haveは結びつきの役割を果たしているにすぎない。またMaria has moneyにおいてMariaは何らかの動作行為をしているわけではないが、has lunchでは「食べる」という動作行為が含意されている。動詞haveは所有、性質、全体と部分などさまざまな結びつきを主語と目的語の間にうち立てるだけであって、どのような結びつきなのかは目的語とその後に置かれる語句によるのである。ところが日本語において動詞は文の最後に置かれ文全体の意味を確定する役割を負っているため、英語の動詞よりも明確な意味を持つ傾向がある。そのため訳を通して英語を学習しようとする、haveだけで膨大な数の日本語の意味を覚える必要があり、はなはだ効率が悪い。

次にbe動詞を例に説明しよう。be動詞は大きく分けて3つの意味を持つ。上の例で述べたように、その3つの意味のどれになるかは後ろに来る語によって

決まる。

(i) 専門的には連結動詞 (linking verb) と言い、イコール記号 (=) のような働きをするだけで強い意味はない。be動詞の後ろの語が名詞の場合には前後の語が同等のものであることを示し、形容詞の場合には状態や性質、感情などをあらわす。

He is a student. (He = a student)
She is tall. (She = tall)

日本語ならば「彼は学生」で意味は成り立ち、友人同士の会話では使われる。この意味になるのは、後ろに直接名詞 (または冠詞+名詞)⁸⁾ か形容詞が来る場合である。

(ii) 存在をあらわす。場所の場合、時間の場合がある。後ろにin, on, atを中心とする前置詞+名詞または位置を表す副詞 (away, here, out, thereなど) が置かれる。

She is in her room.
The meeting is from 10 o'clock to 11.

(iii) 進行形や受動態の一部を構成する。後ろに~ing (現在分詞) や~edなどの過去分詞が来る⁹⁾。

A group of young guys are swimming in the pool.
All the tickets are sold out.

本稿ではbe動詞の現在形は、便宜上am, are, isと省略しないで示してあるが、通常口語ではほとんどの場合I'm, You're, She'sなどのように短縮形が使われる。それはbe動詞を聞き逃しても意味に大きな影響がないということでもあって、(i)の2番目の例文で言えば、Sheとtallが聞き取れれば意味が分かる (Sheはすでに話題になっている人物を指すので時制は聞き逃しても推測できる) のであり、tallと続くのか、in, on, atなどの前置詞を挟んで名詞が来るのかが聞き分けられた時点でbe動詞の意味が明確になる。日本の英語教育では教科書を読むことが多いのだが、印刷された文を読む場合には文全体を見渡すことができ、文全体の文法構造、意味を考えること

が多いが、実際のコミュニケーションの場面では、語彙が順に耳に入り、文が完了するまで全体を見渡すことはできない。したがって文の意味は徐々に明らかにされるのであって、動詞はその要の位置にあり、文全体を確定していく方向性を示すにとどまるのである。文章を書く際には、文全体を見渡し、前の語を修正することが可能であり、実際頻繁に行われている。特に報告書や、論文などの論理的な文章を書く際には、意味が限定されている抽象概念などの書き言葉を使用するが、あくまでも文の意味は前から後ろへと明らかにされていくのである¹¹⁾。次にやっかいな時制の問題を現在時制を中心に考えてみたい。

2. 現在時制

(1) 現在形

文法的に英語を考えた場合、最も捉えにくいものの一つが時制である。一見日本語の時制と似ているように見えて、基本的な時間のとらえ方にずれがあるので、指導者が気をつけないと学習者は混乱する。中でも現在時制はずれが大きい。

家事で手が離せない母親が3人の子供に「誰か買い物に行ってくれない？」と頼んだときに、子供の一人が「僕が行くよ」と言ったとする。この「僕が行くよ」は英語において現在形では表さない¹⁰⁾。日本語では「行く」という動詞の終止形は、これから行うことの決断、つまり意志未来をもあらわす。「私は仕事に行く」というだけでは、この文が現在をあらわすのか意志未来をあらわすのかは分からない。「私は毎朝8時に仕事に行く」は現在で、「これから私は仕事に行く」は未来である。英語ではそれぞれ「I go to work at 8 every morning.」「I'll go to work now. (またはI'm going to work now.)」となる。なぜこういうことになるのだろうか。

一方、「私は新潟に住んでいる」は「I am living in Niigata.」とも英訳できるが、「I live in Niigata.」と訳すこともできる。もちろん2つの英文には意味の違いがあるのだが、「している」という日本語ではその違いは表現できない。進行形を「している」と訳すよう機械的に教え込もうとすると、例外がいくつも見つかるのでかえって学習者が混乱する場合があるので、指導者は気をつけなければならない。親同士の会話でよくある「娘は今大学に行っています。」という文は、今娘が学校に行っていて留守だという

意味か、現在娘は大学生であるかどちらかを意味する。そのどちらであっても対応する英文は進行形ではない。「My daughter is at school now.」や「My daughter is a college student.」などである。もちろん、だから英語は難しいと言いたいわけではない。こうした違いは、英語の現在時制の論理の側から考え、その論理に沿って練習を積み重ねることで乗り越えられると言いたいのである。

英語の現在形は、ある動作行為が現在を中心にして過去から未来にわたって継続しているか繰り返されていることをあらわす。上の「I go to work at 8 every morning.」は仕事に行くという行為が毎朝繰り返されているということをあらわしており、この習慣が変わらない限り使える。この文を若干変えて「I go to work by bus.」とすると、現在を中心にしてバスで仕事に行くことを繰り返していることをあらわす。継続や繰り返しをあらわすので、上の文のevery morningのように頻度をあらわす副詞と一緒に使われることも多い(always, often, sometimes, neverなど)。現在形「I play the guitar.」という文は今現在ギターを演奏しているかどうかとは関係がない。どんな頻度かは分からないが普段ギターを弾くことがあるという意味である。楽器や外国語などの習得に訓練や知識が必要なものについては、日本語では「できる」という能力表現で表すことが普通だが、英語では言語化せず暗黙の前提とされる。上の文に当てはめると、ギターを普段弾くためには一定の練習を積んできたに違いないが、そのことは言外の前提とされるだけで明示されない。またWhat do you do?という質問が職業についての質問になることはよく知られているが、これは現在形の性質から説明できる。この質問の含意をすべて明示して示すと、「普段あなたが継続的に行っていることは何ですか?」ということになり、大人の場合継続的に行っているものの代表が仕事であるため職業を聞く場合に使われるようになったのだが、この質問は職業という生の言葉を避ける配慮を示すことができるという利点もある。

繰り返し・継続の代表が天然現象や科学的事実で、「The Earth goes around the Sun.」は何十億年もの継続の範囲に現在が入っていることを示している。また学術論文や理論的な解説文、マニュアルなどは時間の枠で捉えられないものは現在形であらわされるが、それは論の妥当性が現在だけでなく過

去から未来にわたって適応できるとの前提で文が作られるのであり、その場合の時制は現在形をとらざるをえないからである。次に、英語の現在形の理解を深めるために、現在進行形との対比で現在形を考えてみよう。

(2) 現在形と進行形

現在形をさらに考えるために次の例文を見てみよう。

I walk to work.

この文は、ある程度の過去からある程度の未来まで仕事に歩いて行くことが習慣化されていることをあらわす。頻度をあらわす副詞(always, sometimesなど)を伴っていないので原則をあらわしていることになろう。ここで注目したいのは動詞walkであるが、上記の文中では現在形の動詞walkは出発と途中経過、そして到着(walkの停止)を含む。つまり出発点(おそらく自宅)から歩き始め、仕事場に到着するという行為を繰り返しているということはこの文は意味している。このような行為をコンプリート・アクションと言う。もう一つの文を見ていただきたい。

I start work at 8:30.

この文においてstartは開始の瞬間をあらわしており、経過時間はきわめて短い。8時29分には仕事をしておらず、1分後には仕事をしているということである。このように人間の動作や行動、行為には、一定の長さがあり出発(開始)と到着(終了)を含むものと、出発、開始など経過時間のきわめて短いものとに分けることが可能である¹²⁾。どちらの場合も、現在形で文を作った場合、現在を中心に繰り返すという意味である。例文のそれぞれの動詞を使って現在進行形を作ってみると次のようになる。

I am walking to work.

I am starting work.

現在進行形にすると、現在を含む長い範囲での習慣的な繰り返しという現在形の意味ではなく、「I」が発話している現在行っている当該行為に意味の焦

点が当てられる。さらに上の文と下の文では時間がことなる。最初の文は現在歩行中であることを示すと理解できるが、下の文はそのようには捉えられない。陸上競技などのスタートと同じで開始は一瞬なので、開始している途中を文で捉えることができない。walkしている途中というイメージは容易に思い浮かぶが、startしている途中をイメージすることは困難である。実は下の文は「これから開始するところ」「まもなく開始する」などのように開始へと向かっていることをあらわす。後の文はまだ開始されておらず、まもなく（つまり未来に）開始することを意味する。start, finish, stopなど瞬間的と言ってもいいほど経過時間の短い動詞は進行形をとる場合、近い未来に行くという意味になる。未来というとwillのような助動詞とどう違うのかという疑問が浮かぶと思うが、進行形の場合は決断がすでに下されておりその動詞があらわす動作行為の過程が進行中であることを示しているのである。上の例文で言うと、心理的には仕事を着手しようという気持ちになっていたり、開始時間が近づいてきたりしているということをあらわすにはwillでは不十分である。次の文を見てみよう。

He is dying.

死亡は心臓の停止であり、生と死は截然と分かれており、この文の人物はまだ生きている。この文は、人間は誰でも死ぬという一般論を言っているのではなく、Heと呼ばれる人物の死が迫っていること、重病などによる死へのプロセスが始まっていることをあらわす。過程が始まっているという意味はwill（予想をあらわす）ではあらわすことはできず、進行形が適切である。

動詞の経過時間による分け方は進行形の機能をわかりやすくする上で助けになると考えている。また進行形だけでなく次のような文を理解する上でも有用である。

I saw a bird fly.

I saw a bird flying.

上の例文は一定の経過時間が必要なflyが使われており、「私」は飛んでいる全過程を目にしたのであり、下の文は途中の一部分を目にしたのであり、通

常よく使われるのは下の文である（鳥が飛ぶ全過程を目にするという状況は想像しにくい）。逆に短い動詞を使う場合にはing形が可能な状況は考えにくい。逆に下の2つの文では、後者の状況を想像することが難しい。

I saw a girl stop.

(私は一人の少女が立ち止まるのを目にした)

I saw a girl stopping.

(私は一人の少女が立ち止まろうとするのを見た。しかし止まるまでは見なかった。)

もちろんこのような意味は文法的に決定されているというよりも、発話の際の背景知識や常識に負うものであり、言語使用と状況の中から決定されるものである。しかし言語は常に具体的、現実的な状況の中でコミュニケーションのために使われるものであり、抽象的な文法構造があらかじめ意味を決定しているなどということはないのである。

(3) 状態動詞と進行形

次に状態動詞と呼ばれる一群の動詞について考えてみたい。進行形を学習するときに、be動詞、know、loveなどいくつかの動詞は状態動詞であり、動作行為ではなく静止的な状態を表すため、進行形をとらないと教えられるが、状態動詞の定義が分かりにくく（たとえばstayは動作のように見えないが動作動詞と分類される）、またhaveのように状態動詞である場合とそうでない場合がある動詞も存在すると説明されると、学習者は一層混乱する。前節で触れたように日本語の「～している」は英語の進行形よりも遙かに広い意味の守備範囲を持っており、上の3つの動詞はすべて「～している」と訳すことも可能である¹³⁾。そこで、先ほどのコンプリート・アクションとの対比で進行形を考えてみよう。例文「I walk to work.」においてwalkは出発・過程・到着を含むひとまとまりの行為を意味していたが、例文「I am walking.」では現に行っている行為は途中であり完了していない。しかし歩行に必要な常識的経過時間は、明示されていなくても含意されている。24時間歩き続ける人はまれにしかおらず、「I」という人物の相手はその人物が常識的に歩行にかかる時間を知っていることであろう。したがってこの歩行がある程度で終わることは発話状況によって暗黙のうち

に示される（散歩であればせいぜい1～2時間以内、ハイキングであれば数時間など）。一方現在形の文はそれよりも遙かに長い時間が含まれる。「I walk to work.」では、現在を含む数ヶ月かもしれない数年かもしれない。

上のことから、現在形においては現在繰り返されている動作行為が長い期間にわたって続くという含意を持ち、進行形においては現在行っている行為がその動詞が通常意味する常識的な経過時間内で終了するであろうという含意を持つことになる。たいがいの動作行為は一定の時間で終了するため、進行形には「一時的な」や「今のところ」といった意味合いが生まれることになる。

I love Maria.

I am loving Maria.

上記2つの文の違いはもう明らかだろう。上の文では愛情は（永遠かどうかは別として）続くという前提で発せられており、下の文は遠くない時期に終わりが来るという含意を持つのである。好悪、愛憎などの感情（like, love, hateなど）は、歩行のように意志のままに始めたり止めたりすることのできないものであり、長い範囲の継続の中に現在が含まれることになるため通常現在形であらわし、進行形をとるとかえって停止、終了が含意されてしまうことになる。一度頭に入った知識は忘れない限り脳裏にとどまるわけで、knowを使う時あらかじめ忘却を含意することはない。また頭に入った知識を保持することは何かの行為をしているわけではないので、これらの動詞を便宜的に状態動詞(stative verb)や静止動詞(static verb)と呼ぶ。「I have a car.」という文は「一台の車を所有している」という意味であるが、所有というのは何かをしているということではなく、所有者や社会が所有を認めているというだけで、何かを行っているわけではない⁴⁾。しかしこのような動詞が進行形にならないということはない。進行形にすると一時的、意図的などのニュアンスが生まれる。つまり状態動詞が動作行為をあらわすことになる。

He is being kind.

この文は、何らかの理由で一時的に、意図的に親

切にしているということ意味になる。マクドナルドのコマーシャルには「I'm lovin' it.」という文が添えられているのをよく見かけるが、これは日本語で言うと「はまっている」に近い意味ではないだろうか。ところで、さきほどの動詞stayの意味には一時的ということが含まれているのでwalkなどと同じように行動動詞に分類される¹⁵⁾。

3. 過去時制

過去は、それが前日のように近い過去であっても、膨大な過去の貯蔵庫に蓄積されている。その貯蔵庫から過去を取り出す行為は個人にとっては回想であり、集団にとっては歴史となる。宇宙の歴史が138億年以前までさかのぼり、ホモサピエンスの歴史が25万年、文明の歴史が数千年とすると、過去を語る時われわれはそれだけ膨大な出来事の蓄積を前にするのである。したがって語られる出来事がいつ起こったことなのかについて、対話の相手との間に相互理解がなければその語りは意味をなさない。「A man walked」という表現が意味不明であるのは、現在地球上にいる約70億の人間の半数（男性）と地球全体の歴史上の男性の多くに当てはまるからである。「I walked」となると「I」という人物が生まれて以降（正確には歩けるようになってから以降）のことだと分かるが、それ以上の手がかりはない。それを絞り込むためには過去を表す言葉が文中に明示されるか、対話の相手との間に暗黙の了解がなければならぬ。当たり前のことをわざわざ説明しているように見えるが、日本語では、バス停で待っている時にバスが見えたら「バスが来たよ」、帰宅した時「今帰ったよ」¹⁶⁾と過去形を使って言うことができる。英語より日本語の方が過去形が受け持つ守備範囲が広いと、英語との違いを意識しないで訳をしようとするとうまくいかない場合がある。留意しなければならないことは、英語で過去時制を使う場合には、はっきりと明示されなくとも過去のどの時点なのかを意識されるということである。

She went to Hokkaido last year.

この例文には昨年としか明示されていないが、必ずしも365日というわけではない。旅行であれば昨年の何月何日から何日間の間北海道に行っていたことが常識的な範囲内（旅行であれば数日間）であ

ることが推測される。英語の過去形はあくまでも過去に始まり過去に終了した動作行為、状態をあらわすものであり、現在との関わりを示す場合は現在完了が使われ過去形は用いない。

もう一つ注意しなければならないことは、英語で過去形を使うと、現在はそうではないという含意が生まれることである。「I lived in Kyoto.」は現在は京都に住んでいないということであり、「She was a nice person.」という文は、亡くなっている人物について使う場合がほとんどである。歴史上の人物（現在は死亡している）について語る場合、必ず過去形を使い、現在形を使うのは現在も生きているもの（その人物の作品など）である。英語の過去形は現在と切れており、現在はそうではないという含意があるため、現在の状況に反することを仮定する場合に過去形が使えるのである。

日本語においては過去形と現在形がかなり自由に使われており、次の文のような例も珍しくはない。

トーチカの小さな覗き穴から中尉は米軍陣地の様子をうかがった。

夜襲を予期してか、照明弾がひっきりなしに打ち上げられている。昼のような明るさのなかに、数百メートルの範囲の地形が、気味が悪いほどくっきりと照らし出される。米軍は鉄条網を張り巡らし、戦車を連ねて、厳重な警戒を続けていた。¹⁷⁾

この例文は第二次世界大戦をあつかった小説からとったものだが、作中人物の行為や動きについては過去形を使い、状況の説明や情景描写は現在形が使われている。英語であれば、小説全体が過去形で語られる場合には、情景描写も過去形になる。

このように英語における過去は、すでに終わった出来事の貯蔵庫のようなもので現在と切り離されており、話者はその貯蔵庫のなかから回想によって、過去の出来事を取り出し過去形を使って語るのである。したがって、バス停に待つ人がバスが来るのをみた場合、それは現在（その時点で見えているわけであり）のことであり、回想ではないので過去形は使えないのである。

小括

日本人が英語を学ぶ上で苦勞する理由は、仕組み上の違いだけではない。ここで詳述する余裕はない

が、3点だけ簡単に触れておきたい。順不同であげると、一つが日本語における敬語の存在、2点目は話し言葉と書き言葉の違い、3点目は英語を学習するとはどの英語を学習するのかという問題である。

日本語における敬語は丁寧語、尊敬語、謙讓語など世界に類を見ない複雑な体系を持っており、しかも話し言葉では敬語なしには口を開くこともできないほどであり、毎朝出会う人に対して「お早う」と声をかけるか「お早うございます」と声をかけるか、大きさに言うとか戦略的判断を求められるのである。敬語は日々の人間関係を円滑にする効果もあるが、同時に社会的階層構造を固定化する働きをするので、民主的で平等な社会が（願わくば）進むとすれば簡素化へと向かうはずだが、残念ながら現状は必ずしもそうはなっておらず、多くの若者がその中で呻吟している。また日本の敬語は言語構造のレベルにまで組み込まれ、敬語と意識しない語彙や表現も存在する。例えば「あげる」「ください」はもともと謙讓語であり非対称であるので、giveのように与える場合と与えられる場合のどちらにも使うというわけではないため、訳をしようとするときに戸惑う場合がある。そのため「与える」という訳語が使われたりするのだが、しかし「与える」は日常口語ではあまり使わない表現なので（普通「あなたにチョコレートを与えます」とは言わない）、特に中高生は違和感を抱くに違いない。それを回避するためには図や身振りなどを使って直接英語の意味を理解させるように指導者は努力すべきである。

文字を持つ世界中のどの言語にも話し言葉と書き言葉があるが、日常コミュニケーションのほとんどが話し言葉で行われるのに、知識伝達の多くが書き言葉を使って行われるという使用頻度と重要性のアンバランスが存在する。日本語において、話し言葉では大和言葉が多用され、書き言葉では漢語が多くなるという傾向がある。一方英語ではアングロサクソン系の言葉が口語では多用され、書き言葉にはフランス語系、ラテン語系の語が多く使われる。一例を挙げると、書き言葉でacquireやconsiderを使うような場合、口語ではgetやthinkを使ってあらわされることが多い。話し言葉はその言語の基底にあって、母親から直に音声を通して受け継ぐ。一方書き言葉は、教育、読書を通して主に目を通して学ばれるが、専門的なテーマについての話し合い、議論、また講演やプレゼンテーションなど、口頭でも書き言葉は

頻繁に使われる。話し言葉が基底から書き言葉を支えているのだが、一方で書き言葉の多くが話し言葉にも流入しており、高度な会話を行うときには専門的な用語を使わなければならないし、高等教育を受けた者は書き言葉を多用する傾向があるが、議論などで必要な場合の他に、教養があることを暗に示して差別化するためにも使われる。日本の学校教育における英語教育は、主に書き言葉を学ぶことを目標にしているため、基礎的な口語英語の仕組みの理解や運用練習に時間を割かずリーダの訳読に進むため、読む力はつくが日常生活でよく使われる表現を学ぶ機会が少なく、自らを表現するために英語を使うことを学ぶ機会も少ない。現代のような、国内にあっても外国の人びとと直接話し合う機会が頻繁に起こりうる時代にあっては、訳読式の英語教育が時代遅れであることは明白である。発信型の英語を学ぶ必要がある¹⁸⁾。そのためには日本語と英語の違いを理解し、英語の論理にそってダイレクトに英語を理解していくことが求められる。話し言葉によるやさしい英語表現を繰り返し練習することによって、英語表現の核のようなものを学習者の中に作り、徐々にその核を広げていくことが必要である。訳を使わないで英語の語彙を理解する方法はいくつもあって、実物（映像などを含む）、身振り、その語が使われている例文、英語による言い換え（定義）を用いても語彙は学べる。一定の段階に達したら英語による言い換えて積極的に利用することが英語理解を深め、英語運用力を高め、また英英辞典を使う準備にもなる。英語による言い換えは、一見難しそうに聞こえるが、walkであれば「go slowly on foot」くらいの言い換えで良いのである。大切なのは英語の循環を学習者の中に作ることである。そうして英語の言い換えて思い浮かべながら頭の中で英文を作ろうとすることが「英語で考える」ことなのである。

最後に触れておきたいことは、どの英語を学ぶのかという問題である。現在日本の学校教育ではアメリカ英語が教えられているようであるが、英語は世界中で使われており、英米だけでなくカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、インド、シンガポールなど英語を公用語とする国を数え上げるときりがない。そもそも標準英語と言われるものは英国南東部の有力方言を核にラテン語、フランス語の語彙を加えて人為的に作られ、政府機関、裁判所の公的文書に使われるようになった書き言葉

であり、一般庶民の日常言語とは乖離したものであった。一般庶民はさまざまな方言の中で暮らしていたわけで、その実態は程度の差こそあれ、今でも変わらない¹⁹⁾。また一口に方言と言っても地域方言以外にも階級、職種などさまざまな方言が存在するのである。言語は人間が作り、自分たちの都合に合わせて使用することで発展してきた。確定した固定的で不変の文法と語彙を持った言語が中空に存在するわけではない。この瞬間も世界中でありとあらゆる英語が飛びかっている。我々は日本人の英語を使わざるを得ないのであり、そのことを恥じる必要はない。冠詞は日本語に対応する語がないため、相当な上級者でもうまく使いこなせないのであるが、そのようなことでくじけていては英語による発信はかなわない。つまり英語を学ぶということは日本人の英語（あるいはそれぞれの自分の英語）を作っていく過程と言い換えても良いのではないだろうか²⁰⁾。

本稿では英語のほんの片隅をなでたに過ぎないが、私が上のように考えるのは、言語を学ぶことは、自然科学が無機物を対象にするように取り組むのではなく、言語を発する人間を見、言語の背後にある言語の歴史、言語を使う人間の歴史を考えることでもあると思ってきたからである。今回は英語における未来のとらえ方に触れることができなかったが²¹⁾、冠詞や前置詞の問題と併せて、これからどのようにすれば英語学習者にとって英語が分かりやすくなるかということを考え続けたいと思っている。

注

- 1) 現状を打破しようとするさまざまな取り組みが行われており、その一例が大津由紀雄編著『学習英文法を見直したい』研究社、2012年である。
- 2) 有名な英語学習のコースブック、*Headway*シリーズ、*American Headway*シリーズでは、レベルに合わせてどの文法項目を取り入れるかが細かく検討されており、また同じ文法項目であっても初学者に対しては簡単な説明にとどめ、レベルに応じてより突っ込んだ説明になるよう工夫されている。
- 3) この日本語の特質については本多勝一『日本語の作文技術』朝日文庫、1982年特に第2章参照。また三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、1960

- 年、金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社選書メチエ、2002年参照。
- 4) 実は英語辞典を引くとbeautifulもhappyも名詞の意味も記載されている。そうすると例文は文法的に間違った文ではないことになる。これは例文のような「間違った」英文が歴史的に繰り返して作られてきたため、辞書作成者が名詞の項を立てざるをえなかったのではないだろうか。
 - 5) なお例文「I watched a movie in Shinjuku last Sunday.」の後半は場所と時間であり、標準的な順序では時間が後ろに置かれる。強調する場合には文頭に置くことも可能だが、日本語ほどの自由度はない。場所も時間も基本的な構成は「前置詞＋名詞」である。
 - 6) 広辞苑（第3版）「は」の項目を参考にした。
 - 7) ちなみに「僕は天井」の英語訳はI'll take a Tendon.
 - 8) 以下本稿で名詞とした場合冠詞＋名詞を含む。
 - 9) ここでは進行形、受け身を確認するだけで、それ以上の文法的特性については踏み込まない。また現在分詞、過去分詞と呼ばれているものと形容詞の間には、品詞論の上からは違いがあるだろうが、日常の口語使用という点で言うと大きな溝があるわけではないことを確認しておきたい。
 - 10) 英語では未来形を使う。（I'll go.）
 - 11) 本稿では英語動詞の現在形が持つ継続・繰り返すという点に焦点を当てており、現在形の意味がそれにとどまるものでないことはもちろんである。
 - 12) もちろん無数の人間が毎日繰り返す動作行為を厳密な意味で分類しようとするときのような簡単な分け方ではすまないのだが、英語の学習に役立つ限りにおいての便宜的な分類であると理解していただきたい。
 - 13) I am a teacher.は「私は教師をしている」と訳せる。またknowは「知っている」、loveは「愛している」。
 - 14) それと対比して「I have lunch.」は所有ではなく、食べるという行為となる。
 - 15) startなどの「短い動詞」と、walkなどの意志によってはじめ終了することができる一定の経過時間を持つ動詞の分類は、あくまでも学習者の英語理解を容易にするためのものであり、相対的なものだということをご理解いただきたい。またここでは詳述しないが、どの動詞であれ、進行形では「現に進行中」と「これから近い未来に行く」の両方の契機が含まれており、そのどちらになるのかは状況の明確化（文の後ろで示される場所や時間、暗黙の了解など）によるのである。
 - 16) 英語では前者は「Here comes the bus.」と現在形を使い、後者は英語ではそのような習慣がないので適切な訳はないが強いて言うと「Hello.」か「I'm home.」だろうか。
 - 17) 小林信彦『ぼくたちの好きな戦争』新潮文庫、1993年、11頁。
 - 18) その点で言語学者鈴木孝男の主張は傾聴に値する。『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書、1999年。
 - 19) もちろんテレビの普及などで方言が希薄になっているとも言えるが、英国のテレビドラマを見ると、登場人物がスコットランド方言や北部イングランド方言をそのまま使っているの、英国が標準英語化しているわけではないことは一目で分かる。
 - 20) 最近では英語のローカル化を主張する論者も現れている。詳しくは吉野耕作『英語化するアジア』名古屋大学出版会、2014年。また日本英語の主張については末延岑生『日本英語は世界で通じる』平凡社新書、2010年参照。またローカル英語の必要性を早くから主張した渡辺武達『ジャパリッシュのすすめ—日本人の国際英語』朝日選書、1983年も参照。
 - 21) 英語において未来は動詞の変化（フランス語のように）ではなく、助動詞などを付け加えることによってあらかず（日本語のように）ため、時制（Tense）が動詞の変化による時間の表現であるとするなら英語には未来時制はない。そしてAmerican Headwayシリーズではwant toなども未来の範囲に入れてある。そのため未来形についてはあらためて考えたい。

参考文献

江利川春雄『日本人は英語をどう学んできた—英語教育の社会文化史』研究社、2008年

- 大津由紀雄編著『学習英文法を見直したい』研究社、2012年
- 大西泰斗『英文法をこわすー感覚による再構築』NHKブックス、2003年
- 末延岑生『日本英語は世界で通じる』平凡社新書、2010年
- 鈴木孝男『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書、1999年
- 田中茂範『分かるから使えるへ表現英文法』コスモピア、2013年
- 本多勝一『日本語の作文技術』朝日文庫、1984年
- 本多勝一『実践・日本語の作文技術』朝日文庫、1994年
- 三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、1960年
- 吉野耕作『英語化するアジア』名古屋大学出版会、2014年
- 渡辺武達『ジャバリッシュのすすめー日本人の国際英語』朝日選書、1983年
- Murphy, Raymond. *Basic Grammar in Use*. 2nd Ed. Cambridge, U.K: Cambridge U. P., 2002. [邦訳] ウォーカー泉監訳『マーフィーのケンブリッジ英文法 (初級編)』ケンブリッジ大学出版局、2005年
- Murphy, Raymond. *Grammar in Use Intermediate*. 2nd Ed. Cambridge, U.K: Cambridge U. P., 2000. [邦訳] ウォーカー泉監訳『マーフィーのケンブリッジ英文法 (中級編)』ケンブリッジ大学出版局、2005年
- Soars, Liz and John Soars. *American Headway Level 1*. 2nd Ed. Oxford, U. K.: Oxford U. P., 2012.